

ライフレビューによる認知症高齢者の語りの内容分析 —中等度認知症高齢者を対象とした1事例の実践経過から—

桑原 良子¹⁾, 亀井 智子²⁾

抄 録

目的：在宅認知症高齢者を対象としたライフレビューセッションを継続して行い、語られた内容を記述・分析し、ライフレビューを取り入れた看護実践の対象者への有用性を検討する。

方法：中等度認知症高齢者1例を対象に、ライフレビューセッションを行い、語りの内容を質的記述的に分析した。セッションはテーマを決めて週1回、90分以内を5週連続で行った。研究対象者、および家族にテーマに合わせた思い出の写真の持参を依頼した。

結果：認知症高齢者の語りから、表情、行動、口調の変化、および記憶の想起のきっかけ、回を重ねることによる語りの変化に関する内容105コードが抽出された。コードを類似性により分類し、14サブカテゴリーが抽出され、ライフレビューがきっかけとなり導かれた要素を分類し、6カテゴリー〈記憶がつながる喜び〉〈家族のなかの自分を認知した喜び〉〈記憶をたどりながら他者に伝える〉〈固執した感情を表出する〉〈明確ではない記憶を認識する〉〈自己の存在を認める〉を抽出した。ライフレビューにおいて、映像として残る写真が忘れていた出来事を容易に想起するきっかけとなって、認知症高齢者の自然な言葉を引き出して、〈記憶がつながる喜び〉になっていた。また、子どもの教育、子育てなどの〈固執した感情を表出する〉ことにより、生きがいを思い起こすことにつながっていた。セッションの回数を重ね、繰り返すことにより、想起の内容が重なり、家族や親戚との関係性を語り、語りの内容に深みを増していった。このことから、〈自己の存在を認める〉結果を導いていた。

考察：ライフレビューは認知症高齢者の思いを汲みとること、認知症高齢者の生活史を理解することを可能にした。今後、セッションの方法を検討する必要があるが、ライフレビューは認知症高齢者の心理側面に働きかける看護ケアとして有用であることが示唆された。

キーワード：ライフレビュー、認知症、事例研究、高齢者

I. はじめに

わが国における認知症高齢者数は330万人と報告されている(朝田, 2010)。認知症は記憶、認知の障害を特徴(American Psychiatric Association, 2004)とし、認知症の中核症状、および周辺症状に対する治療には薬物療法と非薬物療法がある(山口晴, 2010)。非薬物療法には回想法(野村, 1998;黒川, 2005)、ライフレビュー(野村, 1998;Garland, 2001)、バリデーション療法(Feil, 2002)、ライトセラピー(Riemersma, Swaab,

Twisk, 2008)などが用いられている。ライフレビューは老年期の発達課題である自我の統合や、高齢になると過去の回想が自然に増える(Butler, 1963)ことから、自分自身を受容していく過程を導く(Garland, 2001)とされている。高齢者を対象としたライフレビュー、および回想法のメタ分析では、うつ症状に改善傾向が見られ(Bohlmeijer, Smit, Cuijpers, 2003)、生活満足度、および感情面に適度な効果が見られた(Bohlmeijer, Roemer, Cuijpers, 2007)と報告されている。しかし、認知症高齢者を対象とした実践報告は少ない。そこで、

受付日：2012年1月31日 受理日：2012年9月20日

1) 東京女子医科大学病院, 2) 聖路加看護大学

認知症高齢者を対象としたライフレビューを行い、語りの内容を分析し、認知症高齢者へのライフレビューを取り入れた看護実践への有用性を検討した。

II. 研究目的

在宅認知症高齢者1例を対象にライフレビューセッションを継続して行い、語られた内容を分析し、ライフレビューを取り入れた看護実践の対象者への有用性を検討する。

III. 研究方法

1. 研究対象者

言語による意思疎通が図れる中等度認知症高齢者1名。認知症者の安心感を得ることが語りを引き出すことから、認知症高齢者の家族1名が同席した。

2. 研究期間

2010年11月1日～2011年1月31日

3. データ収集方法

ライフレビューはテーマに合わせた写真を用いて、研究対象者の反応を観察しながら、半構造的に実践した。ライフレビューにおいて語った内容は研究対象者、および家族の了承を得て、ICレコーダーに録音し、逐語録を作成した。認知症者において非言語的表現である行動、表情、口調が語りと並行するため、その変化を観察し、ノートに記録し、観察した記録はデータの分析の対象とした。

4. ライフレビューの手順

1) 初回面接時の概要

初回の面接時に自己紹介を行ない、最近の出来事に関する会話を導入とした。また、会話中の研究対象者の非言語的表現を観察した。面接の終了時に、MMSE (Mini-Mental State Examination), N式老年者用精神状態尺度 (NMスケール), IADL (Instrumental Activity of Daily Living), GDS (Geriatric Depression Scale) -15を用いて、心身側面に関する評価を行った。研究対象者が回答することが困難な場合には、自宅の様子から判断した回答を家族に依頼した。

2) ライフレビューセッションの概要

(1) セッションの進行

筆者がライフレビューのファシリテーターとなり、セッションは週1回、90分以内として5週連続して行った。ファシリテーターはセッションの開始と終了を必ず伝え、研究対象者が注意散漫にならないように休憩を挟み、事前にトイレに行くなどセッションを途中で遮らな

いように配慮した。また、語りを深く引き出すような言葉かけを行ない、否定せずに深く傾聴した。終了時には次のテーマを伝え、現在の関心事に関する会話を帰結とした。

(2) セッションのテーマと写真の選定方法

各セッションのテーマは、1回目は幼少期から結婚まで、2回目は高等女学校時代、3回目は結婚から子どもの成人まで、4回目は娘の結婚から孫の成人まで、5回目は幼少期から現在とした。セッション終了時にファシリテーターが研究対象者、および家族に次のテーマに合わせた思い出の写真と一緒に選択し、持参することを依頼した。

5. 分析方法

認知症高齢者の語りの内容を逐語録におこし、逐語録をデータとして繰り返し読み、記述された意味内容を解釈したうえでコード化した。認知症高齢者の非言語的表現である行動、表情、口調の変化、および記憶の想起のきっかけ、回を重ねることによる語りの変化を抽出してコード化した。コードを類似性により分類してサブカテゴリー化した。サブカテゴリーは、過去の回想が自然に増え、自分自身を受容していく過程はライフレビューによって導かれると考え、この過程を導く要因となる要素をカテゴリーとした。データの解釈、分析過程において指導教官にスーパービジョンを受け、繰り返し精錬することにより信頼性、妥当性の確保に努めた。

6. 倫理的配慮

本研究は聖路加看護大学研究倫理審査委員会の承認を得て実施した。研究対象者に話の内容が伝わらないことで、傷つくことのないように言葉の伝え方に配慮した。研究の主旨を伝え、参加は自由意思であり、拒否の権利があること、途中で参加を中断しても不利益はないことについて文書と口頭で説明した。家族にも同様の内容を説明したうえで研究対象者、および家族の同意を文書で得た。

IV. 結果

1. 研究対象者の紹介

A氏85歳女性。介護者である娘がセッションに同席した。京都に生まれ育ち、5人同胞第4子の次女であった。幼少期は自宅の部屋を兵隊に提供するなどして父親が地域に貢献していた。A氏は高等女学校家政科に在籍し、教職免許を取得した。親戚一同で家業を営み、結婚後も子育てをしながら実家にいたが、40年前に東京へ引っ越した。57歳の時に夫と死別。現在は長女と2人暮らし、次女夫婦と孫は近隣に暮らす。2年前に京風のお節料理が作れなくなったことをきっかけに娘が認知症に気付

く。京都旅行に行った時の夜間徘徊が、娘の恐怖体験になっていた。初回の面接時は言葉による発言は単語であり、会話は続かなかった。幼少期の頃の話になると、A氏は生き生きとした表情になり、言葉に表現できない事は身振りに表れていた。しかし、家族の制止によりA氏の言葉の表出が抑えられていた。次回以降からはA氏の言葉を待つことを家族に依頼した。MMSE 測定不能、NM スケール21点、IADL 3点、GDS -15が5点であった。FAST の分類から中等度認知症と判断した。

2. 認知高齢者の語りの内容分析

分析の結果、認知症高齢者の語りから105コードが抽出された。コードを類似性により分類し、14サブカテゴリーが抽出された。ライフレビューがきっかけとなり導かれた要素を分類し、6 カテゴリー、《記憶がつながる喜び》《家族のなかの自分を認知した喜び》《記憶をたどりながら他者に伝える》《固執した感情を表出する》《明確ではない記憶を認識する》《自己の存在を認める》を抽出した。

本文中のカテゴリーの表記方法は、カテゴリーを《 》，サブカテゴリーを【 】，コードを< >とし

表1 本事例の5回のセッションを通して中等度認知症高齢者の語られた内容の分類結果

カテゴリー	サブカテゴリー	主なコード
記憶がつながる喜び	記憶につながる思い出の写真に喜ぶ	幼少期の写真を見て歓声をあげる 自分の気持ちを思い出せる写真が残っていることが嬉しい 小さい頃のことを覚えていることに気付き笑顔になる
	家族との思い出を楽しむ	弟と遊ぶことは気が楽だったと内面的な気持ちを語る 毎年行っていた家族旅行について声を弾ませて語る
家族のなかの自分を認知した喜び	家族のなかにいる自分を認知する	可愛らしかったと自分を指し示して笑う 親戚のなかにいる自分と弟を指し示して笑う 父親の肩に手を置く自分を指し示して苦笑いになる
	母親という自分を認知したことに興奮する	母親と一緒にいる自分を認知して口調が強くなる
記憶をたどりながら他者に伝える	写真からの情報に集中する	写真に顔を近付けて凝視する 人物を1人1人指し示して確認する 写真の背景を凝視する
	言葉の連想により当時の自分の思いを伝える	言葉の連想から先生を思い出す 言葉の連想から子どもについて語る 言葉の連想から昔の家について語る
固執した感情を表出する	学生時代に学んだ子どもの教育への思いに固執する	学生時代に勉強が出来なくなった背景を強く早い口調で語る 子どもの教育への思いが増して語りの早さが止まらない
	子育てをしていた頃の思いに固執する	母親の立場から子育ての思いを強く早い口調で語る
明確ではない記憶を認識する	曖昧な記憶に戸惑う	母親のことを思い起こして小さな声になる 家族との情報に一致していないことを知り早口で小さな声になる
	記憶が明確ではないことに気付く	写真の背景を凝視するが何もわからないと繰り返す 覚えて書いておかないとわからないため口調が強くなる 自分が忘れても代わりに覚えていてくれる友人がいることに気付く
	記憶のない自分に驚く	子どもの洋服を作った覚えのないことに声をあげる 友人が亡くなっていたことに声をあげる
自己の存在を認める	支えられてきた親戚の存在に気付く	親戚のなかの特定の人物を強調する 年齢離れた親戚がいたから寂しい思いをしなかったと笑顔で語る
	残っている大切な記憶に安心する	忘れかけていた記憶を思い出して笑顔になる 忘れていてもおかしくはない年齢に気付いて大きな声で笑う
	自分の役割を再認識する	親戚の一員としての決意を語る

て示した。また、語りを「 」で表した。

1) 《記憶につながる喜び》とは、【記憶につながる思い出の写真に喜び】、【家族との思い出を楽しむ】の2サブカテゴリーで構成されていた。

(1) 【記憶につながる思い出の写真に喜び】

料亭前に親戚の一族34名が並ぶ写真を手にとり、＜幼少期の写真を見て歓声をあげる＞。当時は写真を撮ることが特別な出来事だったことから、「ウワー、懐かしい写真だね。」と感情を表出した喜びが声に表れていた。兵隊さん数人の中に交じる兄弟（小学生の頃）の写真を手にとり、「兵隊さんがうちにいる事はお手伝いになっている事だから嬉しかった。こんな写真が残っている事が嬉しい。」と、＜自分の気持ちを思い出せる写真が残っていることが嬉しい＞ことを言葉に表していた。夏休みの家族旅行の写真を手にとり、「夏休みによくここに行きました。(中略) 泳ぎました。何やかんや仲良く遊んだ。兄も裸でこんな格好しているし。こんな小さくても覚えているもんやな。」と、A氏は＜小さい頃のことを覚えていることに気付き笑顔になる＞ことから、家族との思い出の写真に喜びを感じていた。

(2) 【家族との思い出を楽しむ】

写真を媒体にして、＜弟と遊ぶことは気が楽だったと内面的な気持ちを語る＞。夏休みの家族旅行の写真を再び手にとり、ファシリテーターの質問を媒介にして、「家から電車で、みんなで行った。」「空気や水が綺麗だから行ってた。」と、＜毎年行っていた家族旅行について声を弾ませて語る＞。

2) 《家族のなかの自分を認知した喜び》とは、【家族のなかの自分を認知する】、【母親という自分を認知したことに興奮する】の2サブカテゴリーで構成されていた。

(1) 【家族のなかの自分を認知する】

兵隊さん数人の中に交じる兄弟（小学生の頃）の写真を媒体にして、「しかし、可愛らしいね。」と＜可愛らしかったと自分を指し示して笑う＞行為は、家族の中にある自分を認知し、笑いを表出し、喜びを表現していた。また、「兄たちがこの中に交じっていて、余計な2人が入っている。」と自分と弟を識別して、＜親戚のなかの自分と弟を指し示して笑う＞。自宅の奥座敷に座る家族（幼少期）の写真を手にとり、「父の肩にチョコッと手を置いて、この子は本当に。」と礼儀知らずの態度に、＜父親の肩に手を置く自分を指し示して苦笑いになる＞が、父親との近い距離感に笑顔が見られていた。

(2) 【母親という自分を認知したことに興奮する】

自宅の奥座敷に座る家族（幼少期）の写真から、ファシリテーターの質問を媒介にして、「母と一緒に映っている。」と声をあげ、「私と母親やわ。完全に。」と＜母親と一緒にいる自分を認知して口調が強くなる＞ことから、写真と記憶の断片が一致したことに興奮が見られていた。

3) 《記憶をたどりながら他者に伝える》とは、【写真からの情報に集中する】、【言葉の連想により当時の自分の思いを伝える】の2サブカテゴリーで構成されていた。

(1) 【写真からの情報に集中する】

A氏の身を乗り出して写真を手にとり、＜写真に顔を近付けて凝視する＞行為は、写真からの情報を得ようとする動作の表れであった。自宅の奥座敷に座る家族（幼少期）の写真を手にとり、写真を凝視している。「小さい頃の奥座敷。洋服着せられて映っている。楽しいひと時だった。」とその時の気持ちを伝えていた。

親戚の一族34名が並ぶ写真をA氏は娘に向け、親戚が1人1人誰であるのかを指し示し、お互いに言葉を補いながら写真に写る＜人物を1人1人指し示して確認する＞。ファシリテーターに見えやすいように写真の向きが変わり、「親戚の者がこうやって並ぼうと集まって並んだの。これが親戚の一族だね。」と後方に並んでいる男性を指し示し、「私らの時代には親戚が集まると写真を撮った。私たちはこちら辺にいますけどね。」と特定した人物ではなく、写真の前方左寄りに3人並ぶ小さな女の子を指し示していた。家の縁側から庭を背景に兵隊さん数人の中に交じる兄弟の＜写真の背景を凝視する＞。A氏にその真剣な行為について質問をすると、「おばさんが覗いているね。」と写真の背景の家の隙間から覗いていた人物を指し示していた。

(2) 【言葉の連想により当時の自分の思いを伝える】

A氏は写真の中に3人の生徒が庭の掃除をしている姿を見て、「こういう所があったからね。先に、一番に、これやるはるよ。ちゃんとなさってました。時間がきてね、皆さん、さーっ、さーっ、ここのさる方が決まっていますよ。3人位、3人位のね。」と写真の情報から掃除をしている状況を詳細に説明していた。「綺麗に？」の質問を媒介にして、「そう、綺麗に、キチッと。」「やっぱり先生も厳しかったですもんね。キチッとした事を私たちは言われました、ここでやっている時も。だけど先生はそんな意地悪みたいな言い方はなかった。」と＜言葉の連想から先生を思い出す＞。「綺麗に」の言葉を媒介にして、「キチッと」から「教え」を連想して「やっぱり先生が厳しかった」ことを想起していた。

4) 《固執した感情を表出する》とは、【学生時代に学んだ子どもの教育への思いに固執する】、【子育てをしていた頃の思いに固執する】の2サブカテゴリーで構成されていた。

(1) 【学生時代に学んだ子どもの教育への思いに固執する】

生徒が手に教科書を持ち、先生の周りにいる写真をA氏が見ていると、「あんまり勉強しなかったって言ってたよね。」と娘からの質問をきっかけに、「いろいろ後の方が細かいお金が、細かい物が出てくるでしょう。それだけって訳には行かない。やっぱり何て言うかな、あの、

みなさんが一緒にやらはる時の、本て言うか、あれやらがあるでしょう。先生が使われるのに、そりゃ、何も手ぶらで勉強してるって訳には行かないからね。みんな本を持って。ある程度、持って、部屋の中に行っているから。それはある程度使っているもん。何も知らん、そうして自分たちだけって事はないもの。」と教科書を買うお金が勉強するためには必要であったが、お金を自分だけの勉強に費やせる状況ではなかった<学生時代に勉強が出来なくなった背景を強く早い口調で語る>。「やっぱりこういう時はこういう事せんといかんよと教えとてあげないとね。先生として自分がするという事やから、その子どもさんたちも自分でその気になって動いてくれないとね。駄目でしょう。自分の思っているように子どもって動かないですからね。やっぱり、こういう時はこうしといた方がいいのよって、今日は綺麗に出来たねとか、教えてあげないと、こう上手に。」と<子どもの教育への思いが増して語りの早さが止まらない>。「そんな風に私たちを見てくれていたの。」と娘がA氏に感謝の気持ちを伝えたことにより、「そらそうよ。」と笑いを表出し、語りの意図が娘に伝わり語りが止まった。

(2)【子育てをしていた頃の思いに固執する】

A氏は昔の家が写る写真の背景から、賑やかな通りに遊びに行ったことを思い出した後に、「なんらかの形で、私が自分で示さないと、子どもたちにどう言う事をしたらええかと、それしかないもん母親の方は。娘がどうしたいか、どう思っているか考えてあげないと如何から。」と<母親の立場から子育ての思いを強く早い口調で語る>。写真の背景から、遊びに行ったことを思い出し、「遊び」から子どもを連想し、子育てをしていた頃の思いを強調して娘に伝えていた。

5)《明確ではない記憶を認識する》とは、【曖昧な記憶に戸惑う】、【記憶が明確ではないことに気付く】、【記憶のない自分に驚く】の3サブカテゴリーで構成されていた。

(1)【曖昧な記憶に戸惑う】

母親と2人で写る写真を見ていると、ファシリテーターの質問を媒介にして、「母は元気になっている。最近どないしているか。行ってないな？」と<母親のことを思い起こして小さな声になる>。写真を見ていると、「どこかね。こっちから入る時にちょっと……」,「京都ですか?」の質問を媒介にして、「と思いますね。これは、何か覚えているわ。これは。」と顔を近づけるが、「○○?」と娘からの情報が入り、「もうちょっと綺麗になったと思うけどな。こんなゴチャゴチャしてなかった。文字を読んでもわからんな。駄目ですわ。何事もあかん。」と<家族との情報に一致していないことを知り早口で小さな声になる>。

(2)【記憶が明確ではないことに気付く】

友人5人との旅行写真を見て、「どこに行った時のや。1回ね、顔を会わせとくわ。友達と一緒に写真見せて、

そしたら思い出す。私が忘れても友達が思い出してくれはるかも知れない。ここん時、おせーて、おせーてって言ったら、中には覚えて下さっている方がおられるかも。」と<自分が忘れても代わりに覚えていてくれる友人がいることに気付く>。

(3)【記憶のない自分に驚く】

友人と2人で映る写真(結婚後)を見て、娘からの情報を媒介にして友人について語る。語るうちに「今度、1回、会ってくるわ。元気になっていると思うわ。」と、友人に会いたい気持ちをA氏は娘に伝えたが、娘からの情報に、「え!亡くなりはった。」と<友人が亡くなっていたことに声をあげる>。

6)《自己の存在を認める》とは、【支えられてきた親戚の存在に気付く】、【残っている大切な記憶に安心する】、【自分の役割を再認識する】の3サブカテゴリーで構成されていた。

(1)【支えられてきた親戚の存在に気付く】

料亭の前に親戚の一族34名(幼少期)の写真を見て、「あーこれ、小さいお兄ちゃんと大きいお兄ちゃんや。ハハハ、ここ親戚のおじさんが、急に入ってきたんや。こころへんに何人か若い人たちが並びかて、これね、姉さんや。これが兄かね、せやから弟か。これもね、どっかの、こころ辺は、わりとあの親戚どもや。Nさん(親戚の中の1人)や、これは、Nさんやな、女で一番上やったからね。しっかりしてはったからな。」と家族を識別し、N氏を指し示し、<親戚のなかの特定の人物を強調する>。(中略) やっぱしね、ちゃんとやってくれましたもん。単なるあれだけじゃなくて。しっかりしてて、一番上やったからこの人が女で一番、頑張ってますもの。(中略) せやけど、この人がいたから、私たちも引っ張ってもらったんだ。」と特定の親戚の存在について思い出していた。

(2)【残っている大切な記憶に安心する】

写真を眺めながら、「せやけど、別にどうこうじゃないけど、たまにこうして見ると、私もいくらか記憶が残っているからね。全然忘れた訳ではないからね。」と<忘れかけていた記憶を思い出して笑顔になる>。「なんか時々、思い出すとね。長い事、忘れてしまっていたけど、しばらく今でも思い出しています。」とA氏は忘れていた事実を受け入れ、記憶を思い出していることを実感しながら語っていた。

(3)【自分の役割を再認識する】

料亭の前に親戚の一族34名(幼少期)の写真から、「A家としての連絡をよくしていましたからね。私やらと、上の人と、私はどちらかと言うと下の方やったから。」と笑顔になる。「誰も言わなくても抱っこして写しに来ているんだもの。せやからみんないい人ばかり。みんないい人だった。うん。改めて、振り返って、また頑張ってみます。」とA氏は自らの<親戚の一員としての決意を語る>。

V. 考察

1. 本研究の対象者へのライフレビューについて

家族とのコミュニケーションが普段は続かなかったA氏にとって、幼少期の写真が忘れ去っていた出来事を容易に想起するきっかけとなつて、感情とともにA氏の言葉を引き出していた。学生時代のテーマでは口調が早まり、語られた内容をその場で聞き取り、理解することは困難な程であった。それは、認知症の行動・心理症状：BPSD (Behavioral and Psychological Symptoms of Dementia) の1つと考えられる固執の可能性とも考えられた。しかし、A氏の語りの内容を分析すると一貫した教育への思いを、学生として、母親として、自分の立場を変えて語っていた。《固執した感情を表出する》ことは、未解決の葛藤を語る(山口智, 2004)ことにつながり、A氏は子どもの教育、子育てなどの生きがいを思い起こしていたと考えられた。A氏の固執した語りは、認知症高齢者を支える本人の欲求を理解していくうえで必要な語りであったと考える。このことから、語りを途中で遮らずに、語りに相槌を打ちながら、理解しようとしている姿勢(Feil, 2002)を示すことにより、A氏は自分の思いが理解されていると感じるようになっていったと考えられた。

2. 認知症高齢者を対象にしたライフレビューの展開方法について

認知症高齢者を対象にしたライフレビューの方法として、写真による映像を用いること、および回を重ねて繰り返し語ることによって、視覚・聴覚が刺激され、過去の出来事を容易に想起していく状況が生じていた。全セッションを通して、A氏は相手に伝えたい思いを強い口調で語り、自信のないわからないことは囁くように小さく語り、語り口調の強弱に気持ちが表れていたように捉えられた。他にも、人物や物事、空間等に含意される「大きい」「小さい」ということを捉えて、言葉の強弱、速度、位置関係で意味を表現する傾向が見られていた。老年期では自己の認識を瞬時に言語化しにくい傾向(菅谷, 2008)から、言葉の強弱、速度、間、などで表現していることが考えられた。曖昧でつぶやくように語るなど、認知症高齢者にとって、その表現が何を意味するのかを推測して会話をつなげていくこと、会話の内容を確認しながらセッションをつなぐ重要性が示唆された。認知症高齢者の会話をはぐらかさずに言葉を補い、読み説くことにより、会話の内容を理解することが出来るのではないかと考えられた。ライフレビューは認知症高齢者の語りの内容を理解しようとする姿勢により、語りの中の本人の思いを汲みとること、認知症高齢者の生活史を理解することを可能にしていた。

3. カテゴリー構造について

思い出の写真がA氏の視覚的情報となり、当時の人物、生活などを思い起こし、《記憶がつながる喜び》となつていった。A氏は写真の中の自分を認知することは出来なかったが、娘からの情報を媒介にして、家族の中にいる自分を認知することが出来るようになっていった。姉と自分を誤認することがあっても楽しかった出来事として語り、《家族のなかの自分を認知した喜び》になっていた。写真をツールに人物、背景から当時の《記憶をたどりながら他者に伝える》ことから、会話の促進にもつながっていた。また、ライフレビューを取り入れたセッションにより、子どもの教育、子育てなど、《固執した感情を表出する》きっかけとなり、未解決の葛藤を語ることにつながっていったと考えられた。これは、認知症高齢者の生きがい、および希望を満たす自己実現の本質を支援することに有用ではないかと考えた。ライフレビューセッションの回数を重ね、A氏の語りを繰り返し聞くことにより、想起の内容が重なり、当時の感情までも想起した豊かな回想となつていった。結婚後の写真からの情報は、《明確ではない記憶を認識する》ことになったが、その過程を踏まえることにより、残っている大切な自分の記憶を実感し、支えられてきた親戚の存在に気づき、親戚の中の自分の役割を再認識することになっていった。このことから、ライフレビューはA氏にとって自分自身を受容していく過程である、《自己の存在を認める》結果を導いていたのではないかと考えられた。

4. 看護実践への示唆

中等度認知症高齢者の自然な言葉を引き出すことになったライフレビューは、同じ写真を用いて、回数を重ねて繰り返し実践したことにより、会話の促進が見られた。幼少期の想起の内容が重なり、家族や親戚との関係性を語り、認知症高齢者の語りの内容に深みが増していった。このことから、ライフレビューは語りの中の本人の思いを汲みとること、認知症高齢者の生活史を理解するうえで有用であることが示唆された。ライフレビューセッションは病院、在宅など多様に応用ができると考えられた。時間の設定、場の設定、協力が得られる人的環境、個人・複数で行うのか、セッションの方法については検討の余地があるが、ライフレビューは認知症高齢者の心理側面に働きかける看護ケアとして有用であることが示唆された。

VI. 研究の限界と今後の課題

本研究は、言語による意思疎通が図れる中等度認知症高齢者1例を対象とした。写真を用いたライフレビューを連続して実践したことにより、豊かな回想となつて

いったが、今回の対象者は1例であったため、軽度から中等度認知症高齢者において同様の実践により、相違があるのかを検証する必要がある。今後はセッションの方法を検討して、対象人数を増やし、看護実践の適応可能性の信頼性、妥当性を確保していくことが課題である。

謝辞

本研究にご協力を頂きましたA氏とご家族に心より感謝申し上げます。本研究は、2010年度聖路加看護大学大学院看護学研究科に提出した修士論文（課題研究）に加筆・修正したものである。

引用文献

- American Psychiatric Association 編 (2004) 高橋三郎, 大野裕, 染矢俊幸訳. *DSM-IV-TR 精神疾患の診断・統計マニュアル*. 東京: 医学書院.
- 朝田隆 (2010). 日本における認知症患者実態把握の現状. *認知症*. 235(6). 609-614.
- Bohlmeijer, E., Smit, F., Cuijpers, P. et al. (2003). Effects of reminiscence and life review on late-life depression: a meta-analysis. *Int J Geriatr Psychiatry*. 18(12). 1088-94.
- Bohlmeijer, E., Roemer, M., Cuijpers, P., et al. (2007). The effects of reminiscence on psychological well-being in older adults: a meta-analysis. *Ageing Mental Health*. 11(3). 291-300.
- Butler, R. (1963). The life review: An interpretation of reminiscence in the aged. *Psychiatry*. 26. 65-76.
- Fail, N (2002). 藤沢嘉勝監訳. *バリデーション—認知症の人との超コミュニケーション法*. (53-125). 東京: 筒井書房.
- Garland J. Garland C (2001). *Life review in health and social care*. Brunner-Routledge.
- 黒川由紀子 (2005). *回想法—高齢者の心理療法*. (23-31). 東京: 誠信書房.
- 野村豊子 (1998). *回想法とライフレビュー—その理論と技法*. (2-40). 東京: 中央法規.
- Riemersma, R.F., Swaab, D., Twisk, J., et al. (2008). Effect of Bright Light and Melatonin on Cognitive and Noncognitive Function in Elderly Residents of Group Care Facilities. a randomized controlled trial. *JAMA*. 299(22). 2642-55.
- 菅谷泰行 (2008). 高齢者の段階的年齢区分の妥当性と偏差に関する老年言語学的検討—ライフストーリー・インタビューに表れた主観的世界の構成と言語特徴に着眼して—. *20年度日本興亜ジェロントロジー研究報告*. 34-47.
- 山口晴保 (2010). *認知症の正しい理解と包括的医療・ケアのポイント* (第2版). (55-60). 東京: 協同医書出版社.
- 山口智子 (2004). *人生の語りの発達臨床心理*. (11-18). 京都: ナカニシヤ出版.

Life Review for Elderly with Middle Stage Dementia: A Content Analysis

Yoshiko Kuwabara ¹⁾, Tomoko Kamei ²⁾

1) Tokyo Women's Medical University Hospital, 2) St. Luke's College of Nursing

Purpose : The purpose of this study was to provide a life review for an elderly person with middle stage dementia and to describe the themes through content analysis.

Method : The life review was conducted over a period of five weeks. Each session lasted 90 minutes or less. The elderly reminisced about their situation related to their photographs and selected a theme for each session.

Results : The taped and transcribed data was analyzed revealing 105 codes that were abstracted into 14 sub-categories and these were abstracted into six categories, which unified the sessions: (1) pleasure connected to the memory; (2) pleasure by recognizing oneself in the family; (3) tells the others retracing memory; (4) expression of feeling which emerged; (5) recognition of a faded memory and; (6) existence of self-acceptance. These categories demonstrated the changes that occurred through the life review process.

The photographs provided the stimulus for recall and were associated with pleasurable feelings.

A definite aim in life was recollected by expressing the feelings in which a child's education, child-rearing, etc. persisted, and in disclosing unsolved conflict.

By repeating the life review sessions, it became a treasure trove of recollections, stimulating pleasure and building new meaningful narratives about one's life.

Discussion : The life review made it possible to engage people with dementia and to understand a cognitively impaired elderly person's life history. Therefore, it should be considered as a way for nurses to promote positive feelings for people with dementia.

Keywords : Life Review, Dementia, Case study, Elderly